

عاشق فارسی هستيم (Aasheq-e Faarsi hastim) ペルシア語大好き

ようやく「成人」に達したペルシア語専攻

- 言葉の歴史は1千年に遡る -

はじめに

本学に開設されてから僅か22年、ようやく「成人」に達したばかりの若いペルシア語専攻だが、ペルシア語自体は1千年以上の歴史を持つ。中世以来イスラーム圏の文学語・教養語として重要な言語だったペルシア語の専攻課程が本学に開設されたことは、わが国のイスラーム地域研究に力強い制度的裏付けとなったと同時に、エネルギー分野を軸に昨今わが国との関係が緊密化しつつあるイランや、わが国が復興支援をコミットしているアフガニスタンなどのペルシア語圏を舞台に、あるいは本学在学時代の経験を糧に多岐にわたる分野で活躍する卒業生諸氏を輩出する契機ともなった。

ペルシア語について



古都エスファハーンのシェイフ・ロトフォッラー・モスク

ペルシア語（近世ペルシア語）は1千年以上の歴史を誇る世界有数の言語である。9世紀中頃からペルシア人（1935年のイランへの国名変更後はイラン人）が、それまで使用していた話し言葉をアラビア文字で表記し始め、その過程で形成された。ペルシア語は、言語学上はセム・ハム語族のアラビア語とは異なり、パシュトゥー語やクルド語と同系統のインド・ヨーロッパ語

族（インド・イラン語派のイラン語）に属する。「一つの言葉に3つの名称」と表現されることもあるペルシア語は現在、話者人口1億弱だが、6500万の人口を擁するイスラーム教シーア派の大国イランの公用語「ファールスィー」（本学ペルシア語専攻の履修対象）であり、パシュトゥー語とともにアフガニスタンの公用語である「ダリー語」（公用文書の主流はダリー語）や、中央アジアのタジキスタン共和国の公用語「タジーク語」（キリル文字表記）も、発音・借用語などに若干の相違はあるが、本質的にはペルシア語である。近代以前のペルシア語文化圏は上記3カ国のほか、アナトリア（小アジア）、現在のアゼルバイジャン、ウズベキスタン、パキスタン、北西インドなどに跨る広大な文化圏を形成していた。アラビア語が聖典クルアーンの言葉としてイスラーム教徒全体にとっての機軸言語であるとするれば、ペルシア語はイスラーム以前から現在まで5000有余年の文化的伝統を誇るペルシア民族の自己表現の拠り所と言える。フェルドウスィー、オマル・ハイヤーム、サアディー、ハーフェズなどの詩人で知られるペルシア古典文学（10～15世紀）は、今日に至るまでペルシア語文化圏に生きる人々の教養とされており、これらを理解することは彼らを知る近道である。

ペルシア語専攻の生い立ちと名物教授のお二人

わが国において、ペルシア語は本学のインド科出身の故・蒲生禮一先生をはじめとして、昭和初期から熱心な研究の対象となってきた。本邦初のペルシア語学科開設は1961年の大阪外国語大学によるが、約20年後の1980年（昭和55年）の本学ペルシア語学科開設を以って、わが

国におけるペルシア語の本格的な研究・教育が始まったと言えよう。時はまさに、全世界を震撼させた1979年2月のイラン・イスラーム革命の翌年であった。三井グループ主導による石化合併事業IJPCに象徴されるように、革命直前には80社を超える日系企業がイランに進出、在留邦人も5800余名を数えペルシア語のニーズが叫ばれていた。かかる情勢下、従前より新設申請していたペルシア語学科が漸く認可された（但し、同年9月から約8年間続いたイラン・イラク戦争は卒業生の進路にも影響を及ぼすことになる）。その後「ペルシア語学科」は1993年に「中東語学科ペルシア語専攻」に、1995年には「南・西アジア課程ペルシア語専攻」に改組され、現在に至っている。

ペルシア語専攻は、蒲生先生の薫陶を受けた黒柳恒男先生（文学、インド科昭22、後述）によって実質的に開設されたが、開設の翌1981年着任の藤井守男先生（文学、U昭52、現・助教）翌1982年着任の岡田恵美子先生（文学、後述）、清水宏祐先生（中世史、1993年に九州大文学部に転出）、1984年着任の八尾師誠先生（近現代史、現・主任教授）、岡田先生退官後に主任教授として1994年着任の縄田鉄男先生（言語学、パシュトゥー語の権威、1999年退官）、1995年に本学卒業生として初登用された佐々木あや乃（文学、平1卒、現助手）、1999年着任の吉枝聡子（社会言語学、平3、GL平5卒、現・助手）といった日本人教官が教育に携わってこられた。

草創期の名物教官だった黒柳・岡田両先生に若干触れたい。黒柳先生はわが国におけるペルシア語の基礎研究、体系的なペルシア語教育の礎を築かれたパイオニア的存在であり、退官までの8年間、ペルシア語専攻の講義・学科運営の中心となり粉骨砕身尽力された。古典文学の翻訳や『ペルシア語四週間』（大学書林）など多数のテキスト、辞典編纂で知られる碩学でもある。本年喜寿を迎え益々精力的にペルシア語研鑽を続けておられ、近日中に『ペルシア語大辞典』（同）を上梓される。1、2年次の先生の講義は、膨大な単語テストに始まり、続く高速テキスト講読、仕上げは難解な作文の宿題で締め

るという、厳しい中でも学生達への慈しみが感じられるもので、何より先生ご自身が講義を楽しまれていた。講義の合間に傾けられる蘊蓄の数々と朗らかな高笑いは懐かしい思い出である。もう一方の岡田先生は常に女子学生達を勇気づける存在であった。イラン留学のために国王宛に直訴の書簡をしたためるなど、勇猛果敢に単独イラン人社会に飛び込み、イラン人から直接ペルシア文学を学び取った最初期の日本人女性である。道は開かれる、との人生哲学を背中で女子学生達に示され、その講義に魅せられてイラン研究の道に入った者も多い。当時の学生達はペルシア語会話の機微とイラン人氣質の真髓を先生から直伝される幸運に与かったのである。先生は一研究者にとどまらず、溢れる文才を『イラン人の心』（NHKブックス、日本エッセイスト・クラブ賞受賞）などの著書に結実させた文人でもある。



ペルシア語劇「サーサーン朝の娘バルヴィーン」終了後、1986年11月

活躍する卒業生たち

ペルシア語専攻は、開設以来22年間で18期、計327名（年平均18名）の卒業生を世に送り出してきた。第一期生は未だ40代前半と他学科に比べ若いのが、マスコミ、商社、石油会社、外交官などユニークな人材が活躍し始めている。今回、追跡調査が及んだ範囲内で以下の通り業種別に紹介するが、紙面の都合もあり紹介できなかった多数の卒業生にはこの場を借りてお詫び申し上げる（以下敬称略）。

まずは活躍目覚ましいマスコミ業界から紹介したい。専攻語・地域と直接関わっている筆頭格は、共同通信の長谷川健司（昭60）。テヘラン

支局長時代の1997年にハータミー大統領選出の熱気を現場から報じ、現勤務先のロンドン支局からは応援出張で北部同盟のカブール入城に同行取材、全世界が注目するアフガニスタンで年を越した。またNHKでは、カイロでルクソール事件を担当し、NHKスペシャル「イスラム潮流」の制作にも関わった現・テヘラン支局長代理の吉村寿郎(平3)、イラン・アフガニスタン向けのペルシア語放送のディレクター鹿内浩宣(平3)、同じくペルシア語放送を経て現在はBS23 ワールドニュースのディレクター藤田<私市>扶木子(平4)の3人組は局内での評価が高い。敢えて専攻語にこだわらず業界で独自の地歩を築いた卒業生として宇津木<阿曾>香(昭62)を挙げたい。彼女はリクルートで住宅関連情報の編集畑一筋に歩んできた、業界では知る人ぞ知る有能な女性エディターである。95年に『フォレント』誌の創刊を手掛けた後、同誌の編集長に就任、2002年からは『住宅情報Style』及び『都心に住む』の両編集長を兼任する。「めざましテレビ」で組んだ小島奈津子アナのハートを射止めた大野貢(平1)は、フジテレビジョンの辣腕プロデューサーで、入社以来ワイドショーなど数々の情報番組を手掛け、現在は「EZ! TV」の制作にも携わる。他には朝日新聞の牧陽子(平6)、古谷祐伸(平11)、信濃毎日新聞の沼田恭男(平12)らも、将来を囑望される記者である。

次に石油業界では、日章丸事件で知られる出光興産では、初代卒業生の植木聡と中山誠(共に昭59)、昭和シェル石油では戸澤奈津美(平10)、アザデガン油田開発に関わる国際石油開発(INPEX)では松岡大成(平14)が活躍する。中でも植木は、アブダビ勤務を経て1996年より約2年間、在イラン日本大使館に勤務、大使と共にイラン石油相ら石油省高官を相手に石油戦略の議論を交わすなど貴重な体験を積んでいる。

総合商社では、マネジメントを補佐するコーポレートスタッフとして、イランはじめ中東の地域戦略・拠点政策の立案・推進を手掛けてきた三菱商事の梨本博(平1)と外前田晃(平7)がともにテヘラン駐在を経験している。民間企業では、上記以外にソニー、東芝、トヨタ、日

産、日本たばこ産業、ケンウッド他のメーカーや、本邦・外資系金融機関、情報・通信業界等で大いに活躍している卒業生が多数いるが割愛させて頂く。

官公界では、外務省の井澤幹生(平3)と船津<堀内>まどか(平4)がまず挙げられよう。井澤は1993年から約4年間、語学研修および在イラン日本大使館に勤務、経済(後に文化)担当官としてペルシア語を駆使し大使とイラン政府要人との間の通訳などで活躍、その後は本省の中東第二課等を経て現在は国際情報課で情勢分析に携わっている。船津は仏語を履修し、アフリカ第一課で活躍している。通訳官として専攻語を直接活かし警察などで活躍している卒業生達も多数にのぼる。

研究者には、関西学院大学文学部講師(中世史)の後藤裕加子(平1)、本邦唯一のイラン経済研究者として知られるアジア経済研究所の岩崎葉子(平1)、既述の本学講師(古典文学)佐々木あや乃(平1)、同助手(社会言語学)吉枝聡子、中央大学講師(現代文学)鈴木珠里(平4)らがあり、他にもイラン近現代史を専門とする森島聡(平5)ら研究者を志し修士・博士課程で文学、歴史、美術などの研究に励む卒業生も多い。ペルシア語文化圏の歴史や文化的営為はその奥行きと広がりゆえに、知的好奇心を掻き立てる対象が数多いためであろう。

締めはやはり真打に登場してもらおう。本邦随一のアフガニスタン通で、9・11以降頻りにマスメディアに登場し、的確な情勢分析と政策提言で定評を得ている時の人、田中浩一郎(昭60)から小文と写真の提供を受けたので以下に掲載する。田中は本学大学院アジア第2言語修了後、在イラン日本大使館、中東経済研究所等での勤務を経て1999年より国連アフガニスタン特別ミッション政務官に就任、タリバン政権末期におけるアフガン和平調停に尽力し、9・11直後に帰国し現在は国際開発センター主任研究員として多忙な毎日を送っている。田中の功績の陰には夫人の田中<関川>真由理(昭60)の内助の功があるに違いない。

「少数言語を専攻した役得にありつくこともある。自分が和平調停のため国連アフガニスタ

ン特別ミッション政務官に就任した経緯がそうだった。交渉や情報収集のためには、当事者の言語を理解していることが大きな助けとなる。特に、タリバンのような抑圧的な体制の中にいる人たちが、機微に触れる情報や状況、その複雑な心境を密かに伝えようとする場合、通訳や外国語を介してはニュアンスが失われてしまう。政務官として訪れたアフガニスタンの地名は最初から懐かしい響きを伴っていた。フェルドウスイーの民族英雄叙事詩『シャーナーメ』(王書)の物語が展開する中心舞台なのだ。だが、ペルシア語が通じるとは言っても、イントネーション、語彙、言い回し、正書法にまで違いが及んだ。率直に言えば、学生時代に授業を通じて慣れ親しんでいたイランとはまったく異なる世界だった。英語 ペルシア語の双方向通訳まで任された時には苦労させられたものだ。知り合ったアフガン人たちは、時には自分たちの言葉話す異国人を警戒することもあったが、多くの場合は親近感を持つ方向に作用してくれたと記憶している。彼らは藁にすがる思いで平和の到来を願っていた。故に、時にはタリバンに期待を寄せ、時には墮落したタリバンとアル・カーイダの除去に動いたアメリカを支持した。終始一貫しているのは、軍閥支配の終焉を願っていることだ。対テロ戦争の現状と暫定政権の困窮ぶりを見る限り、その道は果てしなく遠い。いま、映像媒体を通じてアフガニスタンの様々な様子が伝わるようになった。悔やまれるのは2年3ヵ月に及んだ国連勤務時代に殆どまったく写真を撮らなかつたことである。写真撮影を厳禁していたタリバンに配慮したからだ。手元に残ったアフガンの名残りは、ペルシア語に付いたアフガン訛だけかも知れない」



2001年8月、ペシャワールでの反タリバン集会にて中央が田中氏

ペルシア語圏のイランとアフガニスタンは、地政学上の要衝にあたり、時代の転換点とも呼ぶべき数々の重大事件の震源地となってきた。エネルギー資源の偏在という背景もある。イランはわが国にとって輸入原油の約8割が通過するペルシア湾及び中東地域の安全保障に多大な影響力を有し、かつイラン自身が全世界の9%の石油(わが国も輸入原油の1割を依存)と同15%の天然ガス(世界第二位)を埋蔵する資源大国であり、両国関係は緊密化しつつある。アフガニスタンについても、わが国政府は国際社会と協調し復興支援のために諸分野で経済協力を実施中である。ペルシア語圏で外交やビジネスを展開する上で、あるいは複雑な中東情勢を読み解き公正な立場から事実を正確に報道すべきジャーナリズムの世界において、イスラーム的価値観、多元的で複雑な意思決定メカニズム、商業民族的なバーゲニング・マインドなどを知悉し、ペルシア語を駆使しつつ彼らの懐に飛び込んで対等に渡り合える地域スペシャリストが求められている。こうした社会的ニーズの高まりに応じ、本学におけるペルシア語及び同語圏の研究・教育は今後重要性を増していくに違いない。ようやく成人したばかりの若いペルシア語専攻だが、卒業生の活躍は寧ろこれからこそが楽しみである。

文責： 梨本博(平1)、文章協力： 藤田<私市>扶木子(平4)、藤井守男(U昭52、本学助教授)他、写真提供： 田中浩一郎(昭60)、梨本<三田>順子(昭63)

2001年3月、イスラマバードでアナン国連事務総長と左が田中氏